

十月五日は「^{だるまき}達磨忌」です。

達磨忌とは、禅の教えをインドから中国に伝えた、中国禅宗の^{しよそ}初祖である達磨さまのお徳を^{しの}偲ぶ日です。

達磨さまには、中国に^{りょう}渡り^{ぶてい}梁の武帝と^{もんどう}問^か答を交わし、武帝には正しい^{ぶっぼう}仏法はわからないようだ^{あきら}と諦めると、すぐに^{すうざん}崇山にある^{しょうりんじ}少林寺にこもって九年間、壁に向かってひたすら坐禅につとめたというお話や、のちに弟子となる^{えか}慧可さまが、達磨さまに教えをいただくために降りしきる雪の中を立ち尽くしても許可されず、^{ひじ}左臂を断ち切ってまでも入門を希望され、その熱意を見極めた達磨さまが^{えか}慧可さまに仏法を伝えたというお話があります。

いずれのお話も、達磨さまが中国の地に禅の教えを正しく伝えようとしているお姿です。

その達磨さまが伝えた禅の教えとは、頭の中で仏教を理解するだけではなく、教えと照らし合わせて、毎日の生活をどう営むかという実践的な生き方の教え・・・

つまり「^{ににゅう}二入四行(ににゅうしぎょう)」と伝えられています。

「^{ににゅう}二入」(二つの入り方)とは、仏教の学び方には理論的な学び方と実践的な学び方の二つがあるということで、「^{しぎょう}四行」とは、その実践的な学び方には四つの柱があり、第一に「^{えん}縁」によって今の自分があること。第二に「^{いま}現在」を丸^{まる}抱えにして生きること。第三に「^{むさぼ}貪り」の心を持たぬこと。第四に教えに沿って生きること、です。

達磨さまは、師匠である^{はんにやたらそんじゃ}般若多羅尊者の命を受けて、お釈迦さま以来の^{しょうでん}正伝の仏法である禅の教えを伝えるために、インドから中国の地に渡られました。土地の様子や生活習慣も異なる中国での布教の旅は、幾多の困難を伴った事は想像に難くありません。

日本では、その幾多の困難を乗り越えた達磨さまの^{ふとうふくつ}不撓不屈の精神にあやかって、選挙などでの必勝を願って用意される真っ赤で^{まある}丸いダルマさんや、全国各地のダルマ市で販売されているダルマさんのように、願い事が叶いますようにと縁起物とされ、とても愛されています。

願いや希望を持って生活することは、とても大切なことですが、真っ赤で^{まある}丸いダルマさんのお姿の根本には、中国禅宗の初祖とされる達磨さまが伝えた禅の教えがあることを忘れてはならないでしょう。